# 東アジアと福岡

East Asia　Fukuoka

令和5年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

## 変革（へんかく）と調和（ちょうわ）の交流史2000年

第5回　1月27日（土）

## 元寇防塁石積みの出現背景を考える

西南学院大学
伊藤　慎二 氏

**入場無料**

**会場** 福岡市博物館

（福岡早良区百道浜3丁目1－1）

**時間** 13時30分～15時00分

※各回の定員や申込方法は、市ホームページでお知らせします。


主催・問い合わせ先
福岡市埋蔵文化財センター
〒812-0881　福岡市博多区井相田 2-1-94
TEL：092-571-2921　FAX：092-571-2825
電子メール：maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp


埋蔵文化財センターホームページ

※会場は福岡市博物館になりますので、ご注意ください。

2023 年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座第 5 回目　　2024 年 1 月 27 日（土）13 時 30 分～15 時 00 分　　於：福岡市博物館

# 元寇防塁石積みの出現背景を考える

**伊藤　慎二**（西南学院大学国際文化学部・教授）

**本日の課題**・・・（１）防塁研究のあゆみから浮かび上がってくることは？
（２）防塁の本来の姿や使いかたはどうだったのか？
（３）防塁石積みの「起源」はどこにあるのか？

## １．元寇防塁研究のあゆみとその課題

元寇防塁「石築地」は、モンゴル帝国（元朝）による二度目の北部九州侵攻（弘安の役・1281 年）に先立ち、鎌倉時代の 1276（建治２）年に急造された。博多湾沿岸の全長約 20km にわたって構築された、長大な防御線による遮断型城郭の一種である。その後も、少なくとも室町時代まで修築維持していたとされる。こうした、長大な防御線による遮断機能を特徴とする城郭は、北部九州では古代の水城がよく知られる。また、近い時期の国内の例では福島県国見町の阿津賀志山防塁がある。ところが、これらは主として土塁で構築されている。同時期の国内で、石塁の類例は知られていないのである。元寇防塁は、「西日本古代山城と戦国城館の中間に取り残されたように存在する軍事的構築物」（齋藤・向井 2016：181 頁）という。

**◆国内外の「防塁」**

長大な遮断型城郭は、世界各地に知られる。万里の長城 万里长城（中国：秦～明など）、チンギス＝ハーンの長城 Чингисийн хэрэм（モンゴル：遼金など）、ハドリアヌスの長城 Hadrian’s Wall（イギリス・ローマ帝国）、アントニヌスの長城 Antonine Wall（イギリス・ローマ帝国）、リーメス Limes（ドイツ・ローマ帝国）、大蛇防塁 Змієві Вали（ウクライナ・紀元前２～紀元後７世紀頃）、水城（福岡県・７世紀）、阿津賀志山あつかしやま防塁（福島県・平安時代）、葛籠つづら城（佐賀県・戦国時代）、能見のうけん城防塁（山梨県・戦国時代）など、多数存在する。

福岡市西区今津から東区香椎まで築かれた元寇防塁は、実態が依然不明確な香椎周辺を除き、地区ごとの違いが明らかにされている。ただし、これらの地区ごとの違いも、塁壁本体の下半部を主とする基礎構造に関する情報がほとんどで、防塁の上部構造については不明確な部分が多い。これまで、西区今津（鏡山ほか 1969）、西区生の松原（鏡山ほか 1968、荒牧編 2001）、早良区西新（柳田ほか 1970、大塚編 2002、伊藤 2017・ 2021）、博多区博多（佐藤編 2002）、東区箱崎（福田・森編 2018、三阪・谷編 2019、齋藤編 2020、福永編 2021・2022）などにおける考古学的発掘調査の結果、複数の地区で共通する特徴や、地区ごとの独自の特徴が把握された（柳田・西園 2001、大塚 2013、藏富士編 2019）（第１図左）。

防塁基底部分の標高は約３～４ｍで、断面形態が ほぼ台形状（箱形）であることで共通する。しかし、海側（正面）・陸側（背面）とも壁面を石積みにする今津・西新・博多地区に対して、生の松原地区は海側壁面のみを幅狭の胸壁状の石積みとし、一段低い陸側は砂と粘土を版築状に互層に重ねた土塁・土壇

状（頂部は「武者走り」状）になっている。また、今津地区の玄武岩主体区間と博多地区は塁壁内部も含めてほぼすべて石積みであるが、西新地区は粘土の基礎地業上に砂と粘土を版築状に互層に重ね海・陸側両壁面のみが擁壁状の石積みである。今津地区の花崗岩主体区間も塁壁内部を砂で満たすが、西新地区と異なり上部は再び石を充填する。なお、西新地区西南学院大学１号館地点例のみ、石塁背後の陸側に独立した版築状の土塁が並走する。そして、最近解明が進んだ箱崎地区は、砂丘の海側にのみ擁壁状の石積みを構築し、その背後陸側に「大溝」が伴う構造である。

防塁本体の石材は、今津地区では周辺産出の玄武岩と花崗岩、生の松原地区では周辺産出の砂岩（姪浜石）と巨晶花崗岩（ペグマタイト）、西新地区では西区姪浜周辺に多い砂岩（姪浜石）と礫岩、博多地区と箱崎地区では東区名島海岸産の礫岩と砂岩が主として用いられている。

各地区の防塁の基底幅は、生の松原例の陸側土塁状部分も含めて、ほぼ３～４ｍほどである。本来の高さは不明確な部分も多いが、もっとも保存状態の良い今津地区では約３ｍの残存例がある。これらの各地区の調査成果を踏まえて、2019 年に刊行された福岡市の『元寇防塁調査総括報告書』は、壁面の石積み・塁壁本体の幅・断面構造の違いで細分し、元寇防塁全体を２類に統合する新たな分類案を提示した。Ⅰ類は従来から知られる海側・陸側の両壁面が石積みの例に対して、新たにⅡ類として海側壁面のみ石垣状（擁壁状）に石積みを行うという類型が設定されている（藏富士編 2019：24 頁）。

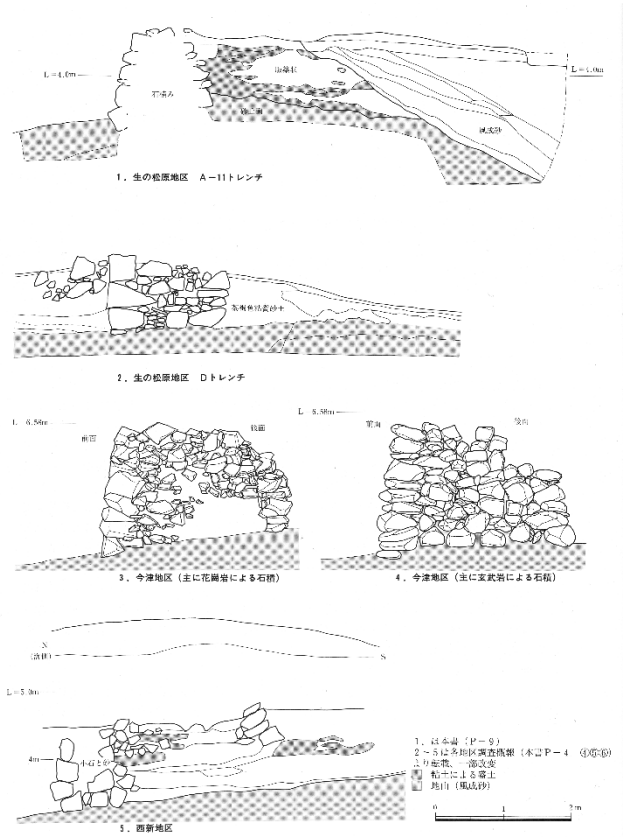
しかしながら、現在までに把握されている元寇防塁の構造は、上部が崩壊あるいは石材持ち去り・破壊などですでに失われたほぼ下半部のみの状態である。発掘調査で検出された遺構も、基底部付近のみの事例が多い。本来あった上部も含めた全体の構造については、今後の検討課題といえる（伊藤 2021： 88 頁）。

**◆西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁**

早良区西新の西南学院大学中央キャンパス構内には、大学１号館建物建設時に調査され、その後復元された元寇防塁があることで良く知られる。しかし、西南学院が現在の西新に移転した当初の 1920 年に、現在の東キャンパスに本館・講堂建物（現・西南学院大学博物館）建設時にも、元寇防塁遺構が偶然見つかっている。戦前の西南学院は、遺構周囲を芝貼りし、生垣で囲んで保存公開していた。近隣の国史跡西新元寇防塁とならぶ最古級の保存整備例であるが、戦後すぐに学院の施設配置図から消え、現在は博物館北側の芝生広場になっている（伊藤 2017・2021）。

## ２．元寇防塁の上部構造と女墻（ひめがき）

築造当初の元寇防塁上部の具体的な形状に関しては、著名な「蒙古襲来絵詞」（後巻１絵 12）で生の松原付近の元寇防塁前面（海側）を、肥後国の御家人竹崎季長一行が通り過ぎる情景描写が、同時代におけるほぼ唯一の史資料である。この場面の防塁上に居並ぶ武士の体勢は、防塁壁面際に腰掛けて足先が見える人物と、鎧の草摺部分など腰から下が防塁の背後に隠れているように見える人物とに描き分けられている。そこで、これらは、防塁石塁部分に対して、そのすぐ背後陸側に一段低い足場状の部分が存在していた状況と解釈され、生の松原地区における元寇防塁復元の根拠の一つとなっている（荒牧編 2001：26 頁）（第１図右）。



**第１図 左：各地区の元寇防塁断面構造**（荒牧編 2001：24 頁）、**右：生の松原復元元寇防塁** 上：海側、下：陸側 ※筆者撮影

生の松原地区元寇防塁の発掘調査結果（鏡山ほか 1968、荒牧編 2001）では、基底部幅で約 1.5ｍの幅狭の石塁と、その後背部陸側に接して砂と粘土を版築状に重ねた土塁・土壇状の「後背盛土」が確認されている。そして、石塁部分の陸側も壁面を意識したやや大きめの石材を整えて積んでおり、石塁塁壁内部の裏込めのような状況とは明らかに異なっている（第１図左１・２）。陸側背後の版築状部分に対して、海側の石塁部分がより高い胸壁状の形状になっていたことは確実と考えられる。このような胸壁状の石積みは、同時代の中国・朝鮮半島の城郭で一般的な堞・女墻（ひめがき・여장）（愛宕 1991、손 2011）と類似する（伊藤 2017：125 頁）。現在までのところ、他の地区の元寇防塁の発掘調査所見では、このような構造は知られていない。しかし、現存する防塁遺構は、いずれも上部がかなり失われた状態である。地区により防塁下半部の断面構造は異なるが、いずれも海側の外壁は石積みで共通する。海側からの外観と実戦時の利用方法の共通性が構築作業の前提にあったのであれば、海側壁面上部が胸壁状に一段高く、背後の陸側が一段低い「武者走り」的な通路空間が、他の地区の防塁上部にも共通して設けられていた可能性が充分考えられる。

## ３．元寇防塁前後の石積み：在来の系譜

元寇防塁の日本城郭史における特異性は、「石垣構造の軍事的な構築物は、中世の歴史のなかでは、戦国城館を除いて他に類例をもたない」（齋藤・向井 2016：181 頁）ことである。

博多湾沿岸周辺地域では、福岡市中央区の鴻臚館北館第Ⅱ期（推定：８世紀前半）に属する高さ４ｍ以上の石積み（折尾ほか編 2004）と、糸島市怡土城（大門遺跡：８世紀後半頃）にある土塁下部外側の最

大高３ｍほどの石積み（瓜生編 2006）が、７世紀頃の古代山城に続く最後の大規模な石積み構築例といえる。どちらも土留め的な擁壁状の石積みで、鴻臚館の例では石積み壁面内部に裏込め石などが見られないことも指摘されている。最近では、福岡市博多区博多遺跡群第 221 次調査の結果、11 世紀後半～12 世紀前半頃の最大高 0.6ｍほどの港湾関連施設とみられる長大な石積み遺構が検出された。裏込め石で調整し面を整える積み方から、中国との関連性も示唆されている（福岡市教育委員会編 2021）。また、福岡市西区今山遺跡でも、平安時代中期の「ドック状遺構」に伴う擁壁状の石積みが検出されている（米倉編 2005）。

以上の例を除くと、古代末～中世の博多湾沿岸周辺地域における石積み遺構は、山岳寺院と城郭・城館に限られる。そこで、それらのおもな事例を以下にまとめる。

**（１）山岳寺院**

薬王寺廃寺（古賀市）・首羅山遺跡（久山町）・西油山天福寺遺跡（福岡市早良区）・正楽遺跡（宇美町）・一滴遺跡（宇美町）などの段差部分に設けられた擁壁状の石積みが代表的である。

薬王寺廃寺の石積み周辺では、９世紀半ば～10 世紀頃の遺物が多数出土している（森下編 1995）。首羅山遺跡と西油山天福寺遺跡の高さ１ｍほどの石積み周囲では 13 世紀代の遺物が多くみつかっており（江上編 2020、山口・岡寺 2011）、元寇防塁と近い時期に構築された可能性のある石積みである。正楽遺跡と一滴遺跡には現存最大高が約２ｍの石垣があり、15～16 世紀の遺物を伴っている（平ノ内編 2003、松尾・平ノ内編 2013、松尾 2020）。なお、正楽遺跡には、内外壁面が石積みの幅狭な石塁状部分「石垣６」も存在する。

**（２）城郭・城館**

a. 宝満山遺跡群第 11 次・21 次調査地点（太宰府市）

造成された平坦面の尾根続き側を土塁で画し、平坦面下側段差に２段にわたる擁壁状の石積み（21SX006 遺構・21SX024 遺構）が構築されている。上段側の最大高は 1.8ｍで、下部ほど大形の石材を利用している傾向がうかがわれる。発掘調査の所見では、特に裏込め石などについては言及されていない。層序と出土遺物から 13 世紀代の遺構とされ、寺院よりも筑前国守護武藤少弐氏の居館との関連性が示唆されている（山村編 2001）。元寇防塁に近い時期に構築された石積みであるばかりでなく、元寇防塁の築造主体にもかかわる可能性がある重要な例である。

b. その他の城郭遺跡

博多湾沿岸周辺地域では、福岡市東区・新宮町の立花山城、福岡市東区の名島城、福岡市中央区の福岡城が、本格的な織豊系城郭石垣の導入例である。しかし、その他の戦国城郭でも、織豊系城郭の石垣との関係が不明確な城郭石積み例が、かなり多く知られる。

現地表で遺構が明瞭に確認できるおもな事例としては、太宰府市有智山城、宇美町頭巾山城、福岡市早良区安楽平城、那珂川市鷲ヶ岳城、糸島市二丈（深江）岳城などがある（岡寺編 2014・2015、林・岡寺 2015）。

これらの多くは、裏込め石を欠くかまたは不充分で、自然石や粗い割石を不ぞろいの面のまま擁壁状に石積みをすることでいずれも共通する。ただし、二丈岳城には、石塁状の部分も知られる。これらの仮に「非織豊系城郭石積み」と名づけられる事例の正確な構築年代などはまだ不明である。戦国期を中心に、織豊期に入ってからの構築例を含むことも考えられる。しかし、博多湾沿岸周辺地域における中世山岳寺院の擁壁状石積み例とそれらの年代観から判断すると、「非織豊系城郭石積み」もその技術的系譜の延

長上に無理なく位置づけられるとみられる。こうした状況は、中井均らが指摘する、安土城築城直前の関西地方周辺における城郭石垣と寺院との関係（中井 1996、岡本 2006）に相似するといえる。

博多湾沿岸周辺地域の石積み事例を検討した結果、古代末以降の現存・確認例はおもに中世山岳寺院における土留め目的の擁壁状石積みに偏り、それらの延長上に「非織豊系城郭石積み」も位置づけられる見込みが得られた。ところが、山岳寺院から戦国城郭へと続く在来石積みの系譜のなかには、元寇防塁の存在感が明らかに希薄なのである。

元寇防塁の特徴である、①長大な防御のための遮断線を、②内外壁面が石積みの石塁で築き、③生の松原地区元寇防塁のような胸壁状の石積みを伴う事例は、いずれも少なくとも同時期に類例を確認できなかった。

同時代の日本全域を考慮に入れても、長距離におよぶ遮断型の城郭技術の先行的採用例は、大宰府の水城を除くと、奥州藤原氏が福島県国見町に構築した二重空堀をはさむ三重土塁の阿津賀志山防塁や、神奈川県の鎌倉周囲をめぐる山稜部の切岸などがあげられる程度である（伊藤 2017：124－125 頁、伊藤 2021：89 頁）。国内の遮断型城郭の類例は、土塁・空堀または切岸のみで、長大な石塁の例は確認できない。

つまり、元寇防塁の出現には、国内のみでは充分に系譜をたどることができない技術的な飛躍と隔絶が存在するのである。

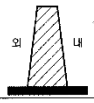
**◆中世都市鎌倉の防御施設**

鎌倉考古学の先駆者である赤星直忠は、鎌倉・室町期の都市鎌倉周囲三方の山稜部上に防御施設があることを研究初期から指摘していた。町の内と外を隔てる尾根を掘削して設けた切通周囲の尾根上各所に多数の平場や堀切などがある。また、鎌倉西側の尾根上には方形に土塁を巡らせた一升枡遺跡・五合枡遺跡などの独立した城郭遺跡もある。鎌倉東側の逗子市側には、名越（なごえ）お猿畠の大切岸（写真）がある。ただし、これらの遺構について、中世都市鎌倉の防御施設のみでなく、都市開発に伴う土砂や石材採取跡との関連も指摘されている（鈴木編　2001 など）。ちなみに、西区愛宕山の北側尾根上にも、このような鎌倉の事例に類似した切岸状・平場状の地形が一部みられる。そのすぐ北側は戦後に造成された住宅地と接しているため、これらがいつ形成されたものであるかは不明である（伊藤 2021：91 頁）。

## ４．高麗城郭との比較

しかし、博多湾沿岸の近隣地域ということであれば、実はこれら元寇防塁の①～③の特徴を備えた城郭がかなり一般的にみられる地域がある。玄界灘・対馬海峡対岸の朝鮮半島・高麗などの東北アジア地域である。

高麗では、モンゴル帝国の高麗侵攻以前から、北方の契丹・女真対策のため、11 世紀前半に黄海側の鴨緑江河口から咸鏡南道の日本海沿岸まで朝鮮半島北部を横断する千里長城（천리장성）を構築している（조선유적유물도감편찬위원회 1991、高 2015）。地域によって残存状態に大きく差があり、良好な例で

| 유형 | 1형 | 2형 | 3형 | 4형 | 5형 | 6형 | 미상 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 단면 형태 | | | |  | | | |
| 지정 | | 별도,애월,북촌,동복,행원,온평,신산 | | 삼양 | 곤을동,한동 | | |
| 비지정 | 금능,신촌,하예 | 고내 | 조천 | 귀덕,신흥,월정,평대,태흥 | 월령,수원,하도 | 함덕,토평,강정 | 보목,일과 |

**第２図 左：済州島環海長城の断面模式図**（고 2022：148 頁）、**右：涯月里環海長城陸側壁面** ※筆者撮影

は現存城壁の高さが４～７ｍほどである。慈江道東新郡のソクセゴル（쏙새골）の長城遺構は、石塁城壁上部の外面側に女墻（여장）＝胸壁、その内側に廻郭道（회곽도）＝「武者走り」が並走する。こうした石塁城壁の構造は、13 世紀前半～中頃の対蒙抗争期（対モンゴル抵抗戦期）における高麗各地の山城（김 2017）にも広く共通する。たとえば、韓国中部の江原道原州市にある鴒原山城（영원산성）は、石塁城壁上部の外面側に女墻、その内側に廻郭道が並走している。石塁城壁の基底幅は３ｍほどで、城壁外面の現存高は２～３ｍ、女墻内側の現存高は１ｍほどである。ただし、特に城壁外面の高さは、土台となる山稜地形に影響を受けてかなり幅がある。そのため、内外壁面が石積みの夾築（협축）の石塁城壁と、外壁面のみが石積みの片築（편축）（内側が土塁状の場合・部分は内托：내탁）となる擁壁状城壁の部分もみられる（차・신・노・박 1998）。これらの城壁の構造は、高麗時代前後の各時代の城郭にも広く共通する（손 2011、나・하 2016）。

さらに博多湾沿岸地域に近接する済州島（耽羅탐라）には、立地・構造・時期・性格まで、元寇防塁と類似した事例がある。済州島北海岸を中心に東海岸の一部にまで断続的に築かれた環海長城（환해장성）（第２図）は、高麗元宗王期の 1270 年に構築されている。三別抄（삼별초）政権最後の済州島における 1273 年の対蒙抗争の際にも増築活用された。しかし、その後の朝鮮王朝期以降も引き続き修築や改変が行われたため、築造当初の高麗期の状態は不明な部分が多い（김 2017：199－200 頁、金・文 2015）。

残存遺構が良好で大規模な例として、済州島北西海岸の涯月里（애월리）環海長城（第２図右）がある。内外壁面が石積みの夾築石塁城壁で、外壁の現存高５ｍ・内壁の現存高 3.8ｍ・横幅７ｍである。その他の地区は、残存最大高と横幅がともに数ｍ程度の例が多いようである。また、石塁城壁上部外面側の女墻とその内側に並走する廻郭道の残存例も、各所で確認されている（김・신・박 1996、고・강・강 1998）。済州島全域の環海長城の現存遺構分布状況に関する詳細な報告書（고 2022）も最近刊行された。

なお、版築工法も石積みと同じく高麗の城郭では多用されている。対蒙抗争期の高麗王朝の遷都宮城である江華島の江華都城（강화도성）や、その後の三別抄政権最後の拠点である済州島の缸坡頭里城（항파두리성）など、多くの版築土塁使用例がある（이 2016、고・강・강 1998、김 2017、오・진 2017、尹 2015）

## ５．まとめ

文化財としての元寇防塁は、戦前の排外的で「神国」思想的な国威宣揚とその記念物顕彰の社会風潮のなかで、最初の価値評価が行われた。その解釈や研究には、最初から一定の枠がはめられていた状況であ

った。そのため、元寇防塁は、日本城郭史のなかで明らかに特殊な位置を占めるにもかかわらず、同時代の世界史的観点から充分な検証が無いまま戦前の研究が開始された。しかし、元寇防塁築造当事者の鎌倉幕府と出先の大宰府にとっての最優先事項は、モンゴル軍の侵攻に対処できる築城技術である。内外のあらゆる関連情報の収集と検討が当然行われたはずである。

蒙古襲来以前の日本と高麗の関係は、対馬を中心とする「進奉船」を介した私貿易や、鎌倉幕府が大宰府に派遣した武藤（少弐）氏と高麗使節との間で、初期倭寇禁圧対策を主とする外交交渉も積み重ねられていた。武家外交により「進奉定約」が高麗との間で結ばれるなどの進展があったことも知られる（近藤 2019）。さらに、モンゴルによる高麗侵攻に対抗した三別抄政権が、日本に対モンゴル抵抗戦への協力申し入れ（1271・文永 8 年「三別抄牒状」）を行っている（石井 2017）。このように、蒙古襲来前段階に、日本と高麗・三別抄の間で多様な交流が存在し、そのなかには軍事分野にまでかかわる情報交流があったことも改めて注意される。そして、文永の役（1274 年）において、モンゴル軍の「てつはう」といった火薬兵器などの新兵器・戦闘方法に直面した。世界最先端水準の国際紛争を初めて経験し、当時の日本国内で一般的な「垣楯」程度の防御施設（川合 1996）の限界を、この時に強く認識したことは明らかである。そこで、このような蒙古襲来前段階の高麗・三別抄と日本との関係を改めて念頭に置くと、たとえば記録に残っていない三別抄・高麗系の博多湾沿岸周辺地域在留者や、高麗の城郭を実見した関係者による、元寇防塁の構想と築造への直接・間接的関与があったことが充分に推測できる。

ちなみに、筆者と同時期（伊藤 2022）に森平雅彦が、韓国の尹龍爀・金普漢らによる文献史的観点からの高麗・三別抄の環海長城や江華都城の海岸防御壁と元寇防塁の関連性に関する見解を紹介し、「興味深い共時性」と国際的視点の重要性を指摘（森平 2022）している。

同時代には、山岳寺院などでの石積みや版築技術と遮断型城郭の先行例が存在した。そこに高麗の城郭に関する知識が新たに加わることで、国際紛争規模に対応した長大な遮断型城郭である元寇防塁の構築が初めて可能になったと推察される。

**◆「逃の浦元寇防塁」問題**

長崎県松浦市星鹿ほしか半島先端部の逃の浦港付近を中心に沿岸部を石積みが断続的にめぐっている。場所によっては、その上方にも石垣が並走する。沿岸部の石積みは胸壁状で、背後に武者走り状の通路的空間が伴う。郷土史研究者の快勝院一誠が詳しく調査し、「松浦元寇防塁」と名付けた（快勝院 2002）。石積み崩壊箇所断面を観察すると、内部に向かって細く尖る石材を積み、その間に割栗石状の小石を多数含んでいる。また、直角状に折れ曲がる石積み部分もみられる。周辺地形なども考慮すると、耕作土の流出防止・潮風防止などの目的で近世に構築された可能性が考えられる。

※本稿は、（伊藤　2022）論文の抜粋を基に、その後の新情報をいくつか追加した。

※環海長城遺跡の現地踏査にあたっては、일영문화유산연구원 박근태院長より、懇切なご教示とご案内を賜りました。

**おもな引用参考文献**　※詳細は（伊藤　2022）の引用参考文献一覧を参照

荒牧宏行編　2001『国史跡 元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 694 集、福岡市教育委員会（福岡）

伊藤慎二　2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁：大学博物館北側の元寇防塁」、『国際文化論集』第 31 巻第 2 号（国際文化学科 40 周年記念号）：121–144 頁、西南学院大学学術研究所（福岡）

伊藤慎二　2021「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁：新資料の紹介」、『国際文化論集』第 35 巻第 2 号：83–116 頁、西南学院大学学術研究所（福岡）

伊藤慎二　2022「元寇防塁の石積みの系譜：山岳寺院と高麗城郭」、『西南学院大学博物館研究紀要』第 10 号：3–17 頁、西南学院大学博物館（福岡）

大塚紀宜　2013「第 3 章 元寇防塁と博多湾：防塁の構造とその戦略的機能について」、『新修福岡市史』特別編（自然と遺跡からみた福岡の歴史）：302–317 頁、福岡市（福岡）

快勝院一誠　2002「松浦元寇防塁について」、『松浦党研究』25 号：125–130 頁、松浦党研究連合会（佐賀）

藏富士寛編　2019『元寇防塁：調査総括報告書』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1382 集、福岡市教育委員会（福岡）

齋藤慎一・向井一雄　2016『日本城郭史』、吉川弘文館（東京）

鈴木次郎編　2001『「古都鎌倉」を取り巻く山稜部の調査』、神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・（財）かながわ考古学財団（神奈川）

福永将大編　2022『箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書：九州大学箱崎キャンパス地区発掘調査報告 5 』、九州大学埋蔵文化財調査室報告第 7 集、九州大学埋蔵文化財調査室（福岡）

森平雅彦　2022「高麗の対モンゴル・日本関係と元寇防塁」、『箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書：九州大学箱崎キャンパス地区発掘調査報告 5 』：139–162 頁、九州大学埋蔵文化財調査室報告第 7 集、九州大学埋蔵文化財調査室（福岡）

柳田純孝・西園禮三　2001『元寇と博多：写真で読む蒙古襲来』、西日本新聞社（福岡）

米倉秀紀編　2005『今山遺跡：第 8 次調査』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 835 集、福岡市教育委員会（福岡）

고　재원 2022『환해장성：역사성 고증 연구』、재단법인 제주문화유산연구원・제주특별자치도（제주）